

OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱゾンタクラブ第26号(2008年9月)



巻頭言

会長2年目

会長 久岡 眞佐代



会長1年目は、いろいろなミスを繰り返しながら会員の皆様に温かく見守っていただき、何とか会長の責務を果たすことができました。ゾンタの会長は、会員の手助けなしでは何もできない役目であることを実感した1年間でもありました。

ところが、会長2年目に入る頃、思いもかけず実母と義母の介護が同時に始まり、一瞬、目の前が真っ暗になりました。そう言えば、私は昔から誰よりもくじ運が悪かったのです。昨年6月の会長就任にあたり、「親の介護が始まる前にゾンタの会長をお引き受けしました」と発言し、母親の人生のスケジュールを勝手に描いたことが神様のお怒りを買ったのではないかとも思いました。

しかし、2人の母親の協力があってからこそ、私は、これまで無制限に時間を使って、子育てと仕事を両立させることができましたので、今度は、私、夫、息子達が恩返しをする順番が回ってきたのだと思い直しました。

幸い、2人の母親の体調が安定した時期でしたので、国際大会(ロッテルダム)に参加し、日本を離れて日常から解放され、

のんびりとぜいたくな時間を過ごすことができました。

会長2年目は、ゾンタで楽しくリフレッシュしながら2人の母親の介護を乗り切りたいと思っています。



2008年 エリアミーティング



「最新の美容外科事情～美容外科の選び方から最新アンチエイジングまで～」と題して、日本形成外科専門医で、ヒルズ美容クリニック院長の丸山成一先生に御講演頂きました。会場の新弁護士会館9階は素晴らしい眺めで、美容のお話を聞かせていただくには最高の雰囲気です。1時間が短く感じ、最後の質問も楽しくわかりやすく答えていただき、少し美容の世界もなんとなく理解できました。これからは老いることにあまり拘らなく、楽しく年を重ね、若くなる事が出来ることに自信を持ちたく思いました。

講演の要約を頂きましたので、そのまま投稿させていただきます。

講演要約

①美容外科の選び方

アンチエイジング(抗老化)のための基本は、食事、睡眠、ストレスなど普段の生活を改善することから始まります。つまり美と健康のQOL(Quality Of Life)の向上を心がけることにあります。その上で、「たるみ」、「しわ」、「しみ」などの自分自身で改善しようにも限界がある「身体的老化」に対しては、アンチエイジング治療が選択されます。近年、アンチエイジング治療は多くの形成外科や皮膚科の専門医が主体となり行われています。欧米諸国では形成外科専門医が美容外科に従事しますが、日本では専門医の資格を持たない研修医を終えたばかりの医師が開業するなど、まだまだアンチエイジングの先進国ではありません。また現在の美容を目的としたアンチエイジング治療は健康保険診療の対象外です。そのため各クリニックは莫大な広告費をかけ、ビジネスとして患者さんの獲得に努めますの

で、ここにも大きな落とし穴があり、結果的にイメージの悪化や治療の質の低下を生んでしまいます。クリニックあるいは美容外科医を選択する時は、ある程度の知識や下調べなど確かな目が必要であることを忘れてはいけません。

②アンチエイジング治療

身体的老化には、紫外線が原因で生じる「しみ」や「小じわ」などの「光老化」と、皮膚や筋肉の衰えで生じる「たるみ」などの「生理的老化」があります。しみやくすみに対しては、ダウンタイムの少ないレーザー治療やフォトフェイシャルなどの光治療がベストです。また小じわにはヒアルロン酸注入やボトックス注射、更に、最近では自分の血液で若返るPRP治療なども話題です。一方で深いしわやたるみにはダウンタイムの少ない治療では限界があり、確実に効果の得る「手術」を選択される方も増えています。

③美容を受けられる患者さんとそれを治療する医師

人は「いつまでも若くありたい」と願います。思い切って美容外科の門を叩かれた患者様は病気を治すわけではなく、「綺麗になる」あるいは「若返り」に來られるわけです。医師は患者様が思い描いている「仕上がりのイメージ」と違わないように、時間をかけたカウンセリング・コミュニケーションの必要があり、患者様はメリット、デメリットをしっかりと理解し、納得がいくまで説明を受けるべきです。その結果、医師は質の高い医療を提供でき、患者さんは安心して治療が受けられるのではないのでしょうか。

女性健康講座 第12回

最新の美容外科事情

《美容外科の選び方から最新アンチエイジングまで》

近年急速に日本でも美容・アンチエイジングへの関心が高まり、それらに関するメディア・広告等による様々な情報が氾濫しています。また研修医を終えたばかりの医師や他科の医師が美容クリニックを開業する事はめずらしくありません。今回のテーマ「最新の美容外科事情」では正しい美容外科あるいは美容治療の選び方、また最新のアンチエイジングにいたるまでご説明させていただきます。

講師:

ヒルズ美容クリニック院長

丸山成一

(日本形成外科学会認定専門医)



報告

牛田 三千子



5月10日から11日にかけて、26地区エリア2第2回エリアミーティングが開催されました。26地区が2分割されてから2回目、そして次年度以降更に分割されるため、エリア2としては最後のエリアミーティングとなるこの会に、200余名のゾンシャン諸姉が参集しました。

安芸コスモスZCの皆様の入念なご準備のもと、会議はスムーズに進行しました。開会式のセレモニーに引き続きビジネスセッションに入り、決算報告、活動報告、収支報告、さらに「国際ゾントの魅力」、「世界大会について」と題し、国際指名委員の原菊子様、26地区ガバナーの林陽子様が夫々スピーチされました。

また1ヵ月後に迫ったロツテルダム世界大会につき、26地区書記の吉田淳子様よりガイダンスがあり、参加者の期待も一段と高まります。日本からは約100名の参加者が見込まれるので、遠路にもかかわらず、ゾンシャンの熱意と関心の高さがうかがわれます。

その後、多くの会員を獲得した10人のゾンシャンにエリアアワードが贈呈され、午前の部は終了。お弁当を頂いたあと、午後はワークショップです。今年のワークショップは、高松ZCのメンバーでもある少林寺拳法グループ総裁の宗由貴様の「相手の立場に立って考えることの難しさ」と題する講演と、(財)広島平和文化センター理事長のスティーン・リーバー様の「日本女性の動きにかかっている世界平和」と題する、被爆都市広島ならではの講演でした。

少林寺拳法については、知っているようで知らなかったその歴史や、男性の武術という先入観のあった少林寺の総裁が美しい女性であることの驚き、また少林寺とソマリア難民救済の活動との結びつきなどを知り、深く心を打たれました。

広島平和文化センターのリーバー様はアメリカ人男性ですが、流暢な日本語で世界の平和には女性の英知と感性が不可欠とのお話で、その美しい日本語と共に感銘を受けました。平和を守るためには黙っているのではなく、声を上げなくてはならない、との思いを新たにしました。

今年は、地区各役員の交代期にあたることから、林ガバナーより山本次期ガバナーへ、また真鍋ADより分割される各ADへと引継ぎが行われました。新旧役員の方々には感謝と期待の気持ちを含めて、盛大な拍手が送られ、ビジネスセッションは滞りなく終了しました。

夜の懇親会も、美味しいお食事、朗々とした地元ゾンシャンの連吟、そして元気な若者たちの深刺としたダンスを堪能しました。

ホステス役の安芸コスモスZCの皆様の心温まるおもてなしに感謝しつつ、来年の再会を約して散会いたしました。

大和ミュージアムを見学して

笠置 伸子



5月10日・11日と広島で安芸コスモスによるエリアミーティングが開催されました。

その折、10日午後からのオプションツアーで呉市にある「大和ミュージアム」を見学。大阪Ⅱゾントクラブからは、宮本・牛田会員と私が参加し、リーガロイヤルホテルからバスをチャーターして1時間位で着きました。

生憎、お天気はあまり良くありませんでしたが、広島会員の皆様のご配慮で濡れる事なく見学をする事が出来ました。

愛称「大和ミュージアム」(呉市海軍歴史科学館)は明治以後の造船・製鋼を始めとして各種の科学技術を紹介。当時の生活や文化と共に展示されています。その中で平和がいかに大切であるかを再認識し、後世に伝えていくのを目的として作られています。

明治政府は明治22年に海軍鎮守府を呉・横須賀・舞鶴・佐世保に設置。呉はその中心的な存在とされました。三方を山に囲まれ、防御に優れた地形であり、艦艇の出入りや造船に適していた為です。

その当時、鎮守府建設の為に全国から多くの技術者や労働者が集まり、やがて海軍第一の造船所へと発展。呉海軍工廠が設立されました。

そのような歴史の中で、昭和8年に戦艦大和の造船計画が検討され、昭和12年には呉海軍工廠で起工式が行われました。

その3年後、『大和』と命名。進水式が行われ、昭和20年4月7日に沈没するまでの5年間出撃をしていました。

その設計図は47枚にもなり、全長は263メートル・主砲は45口径46センチの三連装。三基九門と副砲は六基装備され、常時2,500人以上の乗員が乗り込んでいたそうです。(出来る限り詳細に再現された戦艦大和の $\frac{1}{10}$ の模型が「大和ミュージアム」に展示されています。)

その構造は極めて複雑で、計画が完成するまでに時間が掛かりすぎ、進水をした時には計画当初とは随分と情勢もかわり、すでに戦争の主力は戦艦から航空機に代わっていました。大和の活躍する場所はあまりなく、後方支援任務が多くなりました。

大和を造船する事によって研究された技術等が、戦後あらゆる方面の新産業の礎として生かされています。

例えば、製造工程による管理生産システムは低コスト・低人数で建造する事ができ、戦後10年で世界一の造船国となり、測距儀は世界一でこの技術をもって日本は精密光学機械産業で世界有数となりました。

またこの当時から船内の室温は27℃に保たれる冷房技術が装備され、3,000人以上の乗員の食糧を1ヶ月位無寄港で保存できる冷凍・冷蔵技術を備えていました。

このような技術は戦後、家電メーカーの基盤となり、主砲等の製造技術は原子炉の圧力容器の漏れを調査する水圧試験等に利用されています。

その他、新幹線の研究・鋳物技術・特殊鋼等さまざまな分野で現代にも受け継がれています。

私は今まで大和が船というのではなく何か人の運命のようなものを感じ、生まれた時にはその能力を使う所がなく、とても悲しい人生を生きたような思いでしたが、「大和ミュージアム」を見学する事によってその考えはすっかり変わり、これからも「色々な分野でいき続ける大和」という思いでいっぱいになりました。

報告

久岡 眞佐代



大阪Ⅱゾンタクラブから笹岡厚子さん、内藤恵子さん、私の3人が国際大会に参加するため、6月28日(土)日本を出発し、7月6日(日)帰国しました。

内藤さんには1年前から旅行プランを立てていただき、ロッテルダムでは英語に堪能な笹岡さん、内藤さんのエスコートを受けて、楽しく充実した1週間を満喫しました。国際大会終了後、デルフト、アントワープ、ブルージュの観光にも足を延ばし、お2人には感謝の言葉もありません。

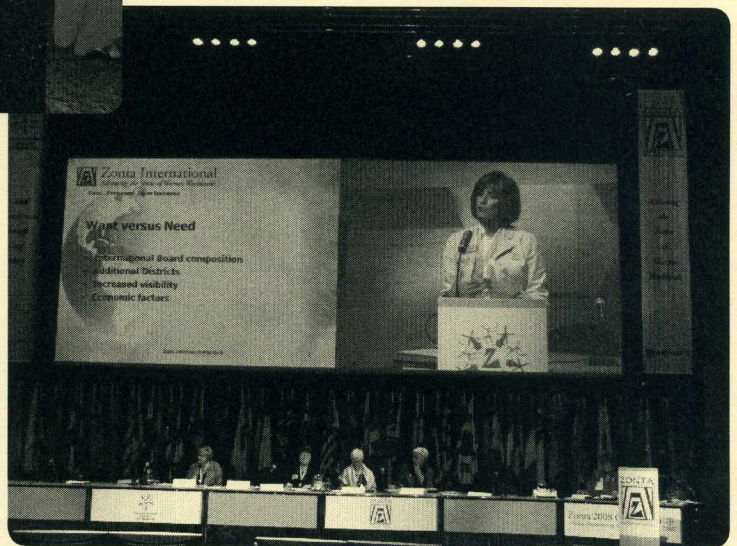
国際大会初参加の私は、ビジネスセッションで重要な議題の採決に投票できるか不安でしたが、多くの日本のゾンシャンに助けられてデリゲートとしての責務を果たすことができ、大変安堵しています。

午前8時30分から午後4時まで続く会議では、世界のゾンシャンの熱心な討議に心を打たれ、ゾンタとは素晴らしい女性

の集まりであり、ゾンタの情熱と誇りを強く実感しました。この実感こそが私にとって国際大会参加の最大の収穫であり、思い深い旅になりました。

議事内容の詳細は割愛しますが、私が印象に残った審議事項があります。それは「Chairman」を「Chair」に換えるという議案です。当クラブの審議では、「Chair」に換えるべきであるという結論でしたが、国際大会では、さほど熱心に議論されることなく、「Chair」に換えないという採決結果になりました。

「Woman」にも「man」がついているというジョークが出たとき、会場から笑いと拍手が沸き上がりましたが、私は笑えませんでした。日本と英語圏に住む人々の英語に対する感性の違いかもしれませんが、身近な言葉遣いから意識的に変えていかなければ男女差別を完全に解消することは難しく、今後も大いに意見交換されることを期待したいと思います。



オランダ流で行こう

----- 内藤 恵子



ROTTERDAMのホテルでこの原稿を書いています。オランダのZONTIANの暖かく行き届いたおもてなしに、感激しています。「オランダ流で行こう」という活気的なイベントから、帰ってきました。オランダのZONTIANの各家庭にそれぞれの国のZONTIANが、20人ずつ招かれ、ホームパーティーが開かれました。落ち着いた雰囲気、各国のZONTIANが、楽しく交流できました。私が訪問したのは、アムステルダム郊外の高級住宅地で、中庭のある3階建てのレンガづくりのお家でした。玄関をはいると、書斎があり、子供さんの肖像画が2枚かけてありました。リビングにはマントルピースと応接セットがあり、次の間にグランドピアノがありました。まず、シェリー酒(黒スグリが入っている)で乾杯し、歓談のあと、夕食になりました。サーモン、ニシン、えび、ポテト野菜のサラダ、チーズ各種。コキール、マッシュルームのシチューをパンのカップに入れたもの。お酒は、ワイン、ビールを飲まれていたようです。24、5歳のご息がサーバーしてくださいました。メルボルン大会のチェアマンもおられ、フィンランド、スウェーデン、カトリニア、ドイツ、日本というメンバーでした。大阪Iの中納さんがピアノを弾いてくださって、雰囲気がなごみました。音楽は、世界共通で、どこでも同じ歌を共有できます。スウェーデンの女医さんがとても音楽好きで、私に歌えとってくださいますが、とても1人で歌えないので、あなたこそ歌ってくださいとお願いしたら、すぐ歌ってくださり、そのあとは、皆で、シューベルト、第9、カルメン、思いつくまま歌いました。デザートに、シナモンのたっぷり効いたアップルタルトを頂きました。気がつくと9時すぎでいて、楽しい夕べでした。皆、この企画は良かったと喜んで解散しました。この楽しいセッションが伝わりましたか？是非世界大会に参加してください。

国際大会に参加して

----- 笹岡 厚子



女性ばかりの国際大会に参加するのは初めてで興味津々で行ってまいりました。開催地のロッテルダム市は先の大戦で破壊されつくしたようで、他のヨーロッパの街のように趣のある旧市街もなく緑も少なく殺風景な大阪に似た街でした。会場となったドーレンシアターも機能的ではありましたがつい見逃してしまいそうな冴えないエントランスでおおよそ建築としても魅力の無い建造物でした。ただロッテルダム中央駅から徒歩5分内で移動に便利でした。会議は殆ど久岡先生におまかせして内藤先生とアムステルダム、デルフト、などのエクスカーションに参加しました。中でもオランダの家庭訪問のエクスカーションが一番印象に残りました。余りに多くの申し込みがありバス何台にも分乗してそれぞれ20人のグループで各家庭を訪問したのですが、様々な国の方とゆっくり話が出来、ホストの方の気配りが行き届いて楽しい一夜を過ごすことが出来ました。会議は年会費値上げについての時に参加しましたが賛成、反対それぞれ民族の違いのような点もかいま見られて聞いていて飽きませんでした。ただ公用語が英語ということで発言に言語のハンディキャップがあり東南アジアの方の発言が無かったのは残念でした。様々な意見を纏め上げるには強引なくらいのリーダーシップが必要なのが現会長、前会長の発言などからも伺われました。会議の後ロッテルダム市フィルのコンサート、さよならパーティと続き終了いたしました。パーティは民族衣装が華やかで楽しかったです。

会議が終わりほっとして3人でブルージュとアントワープに国際列車に乗って行ってきました。ロッテルダムがオランダの南部に位置するためアントワープまで1時間、さらに乗り換えて1時間でブルージュでそれぞれ日帰りが可能でした。ロッテルダム中央駅は改築中でプラットホームの他は何も無いといった状態でした。列車は正確な時間で運行されておりとても便利でした。2等は満席なので1等に乗りましたが長い列車で何両目が1等なのかかわからず到着と同時に走るというはめになりました。アントワープ中央駅は100年ほど前に作られた美しい駅で、旧市街まで徒歩20分位でぶらぶらと両脇の店を見ながら歩いているとなんとなく楽しくなってきます。オランダとは少し違うなという感じです。ルーベンスの家に寄りましたが、あまり好きでもない画家ですが一見の価値はありました。ブルージュは中世そのままのような運河がめぐらされた美しい街でした。観光客が溢れていて、遠くから尖塔が見えるのですが路地はくねくねしていて近寄ることがなかなか出来ないというもどかしさがあります。ついつい歩き回ることとなり帰る頃にはぐったりでした。夜10時でもまだ明るいオランダではつい寝そびれてしまいました。



アサヒビール大山崎山荘美術館を訪れて

尼木 純子



4月19日ゾンタクラブの移動例会として

10時10分…JR京都線・山崎駅・改札口を出たところで集合し

アサヒビール大山崎山荘美術館を訪れました。

美術館：陶磁器・モネ「睡蓮」など美術品1000点

本館：大正～昭和初期建築

新館：安藤忠雄氏建築

庭園散策

12時40分…例会・昼食「老香港酒家」高槻店 OLD HONGKONG

RESTAURANTで飲茶を楽しみながら、5月4日のイ

ベント準備事項やバイロース改正案について審議

いたしました。

4月という最高の季節に恵まれ、美術館となった建物の美しさや、ほっと出来る雰囲気味わいながら、館内を散策いたしました。時折、ドイツ最大のオルゴールメーカー（今はもう作っていないのですが）の「荘厳で快い最高の音色」をかもしだすというPolyphon.Giantが美術館の建物のかもしだすムードにぴったりな音色でオルゴールの演奏を奏でます。周囲の美しい景色と（ちょうど、八重桜や、ツルキキョウ、ジャガ、ムスカリ、ヤマブキの花々が咲き乱れていました）美味しい空気を思いっきり楽しみながら、大山崎美術館をゾンタの皆様と談笑しながら、ゆっくり散策いたしました。

ゾンタの皆様、是非この風光明媚な大山崎美術館を訪れてみてください！

沿革

アサヒビール大山崎山荘美術館（あさひびーる・おおやまざきさんそうびじゅつかん）は、アサヒビール運営による私立美術館で、京都府乙訓郡大山崎町に立地。大阪府と京都府の境にある天王山の山腹に位置し、真下に木津川・宇治川・桂川の三川が淀川へと合流する美しい風景を見ることが出来る。大山崎山荘美術館のコレクションの中核は、朝日麦酒株式会社（現アサヒビール）の創業者として知られる関西の実業家・山本為三郎の収集したコレクションである。彼は、大正から昭和初期に柳宗悦らが提唱した「日本民藝運動」の賛同者であり支援者でもある。大山崎山荘には民芸運動にかかわる河井寛次郎、バーナード・リーチ、濱田庄司、富本憲吉、棟方志功といった作家たちとの交流の中で収集された作品が展示されている。陶磁器・染織・絵画などの作品や、彼らにインスピレーションを与えた朝鮮王朝の古陶磁、イギリスのスリッパウェアなどの古陶磁といった、生活用品でもあった美術品がおさめられているが、これらは山本自身が日常親しく愛用したものばかりである。ほかにも、クロード・モネの絵画『睡蓮』連作を複数所有するほか、モーリス・ド・ヴラマンク、アメデオ・モディリアーニ、パウ

ル・クレイ、イサム・ノグチ、アルベルト・ジャコメッティ、ヘンリー・ムーアなど、第二次世界大戦前後の近現代美術も展示されている。

建物は実業家・加賀正太郎が1932年の昭和初期に完成させた三階建てのイギリス・チューダー様式の山荘である本館と、それとは別に隣接して地下に作られた安藤忠雄設計の現代建築の新館「地中の宝石箱」からなる。山荘は戦後に荒廃していたが、保存運動が高まり1996年に今日のように私立美術館として再生された。

大山崎山荘

山荘本館大山崎山荘は加賀正太郎という人物の建物だった。1888年、大阪船場の株相場師の息子として生まれた彼は、現在の一橋大学を卒業するとイギリスを中心に欧州へ遊学し、アルプスの山々に登頂した日本人のさきがけとなった。日本帰国後は証券会社（加賀証券）を設立したほか、1934年にはサントリーの前身壽屋で



山崎工場を立ち上げたもののオーナーとの路線対立から独自でウイスキー製造に乗り出した竹鶴政孝を支援して大日本果汁（後のニッカウヰスキー）創立に参加するなど、イギリスから持ち帰ったモダンな生活様式を日本に定着させようとした。

彼は天王山麓の淀川の流れを見下ろすこの場所に、テムズ川を見下ろすウィンザー城の風景を重ねあわせ、ここに山荘を作りたいと考えた。1912年に建設に着手、1915年には最初の木造の望楼「白雲楼」が、さらに増築を重ね1932年には現在見る本館である「霽景楼（せいけいろう）」が完成した。これは構造は鉄筋コンクリート造であったが、外観は木の柱を露出させその間にレンガ壁を組んだハーフティンバー工法で、淀川を見渡すテラスが備えられていた。内部はがっしりとしたイギリス風の調度品がそなえられていた。加賀は併設された温室でイギリス時代以来夢中だった洋蘭の研究や品種改良を進め、『蘭花譜』という図録を出版し、1954年に死去した。

河村さと子ソプラノリサイタル

田中 茂美



平成20年5月4日(日)午後2時から「いずみホール」において、当クラブの「名花」であり、関西Ⅱ期会所属、兵庫大学短期大学部准教授でもある名プリマドンナ「河村さと子」会員のリサイタルが、今年度のイベントとして開催されました。この音楽会は伝統ある大阪文化祭参加として公認されたイベントです。

今回のイベント開催のきっかけは、河村さと子様が約1年前に、ドイツ・ムルナウ市でリサイタルを開催されたおり、ムルナウのゾンタクラブの方が「オペラの世界にも女性の地位向上を目指す力強さがあるべき」との進言をお受けになり、「ゾンタクラブにふさわしいリサイタル」を再演していただきたいとの声が多く挙がったことでした。以後、久岡会長以下、皆様の一致協力と河村さと子様の多大なご尽力により実現の運びとなりました。オペラのアリアは、才能は勿論のこと、積み重なるレッスンの努力と体力が要求されますが、有名なアリアをお得意のドイツリードで5曲、次に夕鶴、プッチーニを5曲、更にアンコールで5曲と珠玉の名曲をお聞かせいただきました。ひたむきな愛と毅然とした生き方をしたオペラの主人公

を蘇らせる美声に感銘をいたしました。衣装も素晴らしく、シンプルで品位に満ちていらして、特に色とりどりのストールが舞台に美しく映えました。効果的なストールの使い方を舞台で印象的にできる方は少なく、河村様のプリマドンナとしての舞台キャリアを改めて感じました。舟橋美穂様の伴奏も河村様と大変息が合っており、難しいオペラアリア伴奏の多彩な陰影を巧みに出しておられ、数々の業績を積まれた方らしい素晴らしい演奏でした。

当日、会場は、ゴールデンウィーク中にも拘らずほぼ満席で、アンコール曲が終わっても鳴り止まない満場の拍手がこのリサイタルの素晴らしさを物語っているようでした。

リサイタルに際し、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館、関西Ⅱ期会、真声会、日本シューベルト協会、日本リハルト・シュトラウス協会、神戸音楽家協会各位に御後援を頂戴し、また、大阪アーティスト協会様にお世話になり、安心して今回のイベントを楽しむことが出来たことを心より感謝しております。ありがとうございました。河村さと子様に深謝！



ピアノと私

萩原 謡子



小学校2年生からピアノを弾き始めて50年近くなります。そして、教えることを始めて35年。好きなことが仕事となりピアノに触れない日はありません。本当に幸せなことだと思っております。

昨年9月に堺市内に自宅とは別に念願のピアノ教室を立ち上げました。こちらでもピアノレッスンのほか、ミニコンサートを開いたり、リハーサルに使ったり音楽好きの人たちの輪が広がりつつあり嬉しい限りです。「うたごえサロン」も月に3回開講し、歌好きの人たちが集まって童謡や唱歌などを歌っております。

現在、4歳から83歳までの80名近い老若男女がピアノのお稽古に通って来ます。私の教室では音楽力を付けて頂けるようにソルフェージュ(注*)にも力を入れております。5名のスタッフ達がソルフェージュを担当していますが、どのようにしたら楽しく音楽力を付けられるかミーティングをしては研鑽を重ねております。何しろ、昔私がピアノを習っていた頃の先生は近づき難い存在で、先生と雑談なんてとんでもないことでした。レッスン自体が楽しいと思ったことはなかったです。ですから「楽しい」はキーポイントです。

レッスンに訪れる15名の大人たちの動機は様々です。83歳の男性は初めてのピアノですが、いつも歌っているカラオケの歌を弾き語り出来るようになるのが目標です。レッスン1回目から両手で弾け、ご自分に感動したようです。また、先生が怖くて子供の頃辞めてしまったけれど、年月を経てやっぱりピアノを弾いてみたいと思い立ち、ネットで私のHPを見つけて入門された方もおります。皆さん、憧れの曲に次々挑戦中です。

昨今は、一人で週に3つも4つもお稽古事や塾に通う子供たちが多く、ピアノを習うことは楽しみの中に入らないと長続きしません。練習時間を確保することも大変なことのようにです。短い時間で効率よく上達し、ピアノだけでなくいろんな楽器や歌うことも生涯楽しめるようになってもらうために、コミュニケーションと遊びの要素を取り入れたレッスンを展開しております。教室生たちは皆、生き生きのびのび音楽を楽しんでおります。

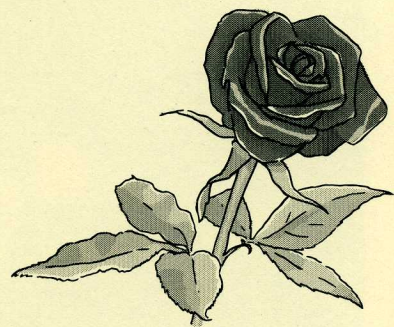
しかし、発表会やコンクールでは演奏の厳しさをひしひしと感じてもらいます。本番に自己ベストの演奏が出来るように、妥協を許さず「とことん頑張る」ことも教えます。それを乗り越える度に皆レベルアップしております。

私はもともとピアノを黙々と弾いている方が好きで、人とお話しするのは苦手な性格だったのですが、今では人との出会いが楽しくてたまりません。ピアノを通して世代を超えた様々な出会いがあります。人が自分を育ててくれているようにも思っています。

現在、HPにブログ三本。教室のスタッフ達と月1回発行の「ピアノ新聞」、ハーモニカのもり・けんさん発行の童謡伝道新聞の連載記事、ピアノの専門月刊誌の執筆・・・と今まで自分が蓄積してきたことを発信する機会も与えられてありがたいことだと思いきり切っております。

ピアノは私一人の楽しみだけに留まらず、たくさんの人たちに音楽の素晴らしさを伝えて行きたいと思う日々です。

(注*)私の教室ではソルフェージュとは、読譜力、リズム感、音楽の基礎知識、歌、音感、メロディーや和音を聞き取る、伴奏付け、曲作りのことです。



編集後記

久岡前広報委員からバトンを受けて、前号から編集作業を担当しています。印刷費の負担を軽くするため、自分で完全編集ができないものとそれ用のコンピュータソフトを試してみましたが、なかなかうまくいかず、やはりプロの印刷屋さんにかんりの部分をお任せすることになりました。宮本、辻、清水、坂本の4人の広報委員のチームワークでがんばりたいと思います。